

鹿児島女子短期大学紀要
第54号 (2018) 139～151頁

翻訳

A. A. ミルン「名誉ある戦争」

War with Honour

著：A. A. ミルン
A. A. Milne

訳：吉村 圭
Translation: Kei Yoshimura

鹿児島女子短期大学

Keywords : A. A. Milne, Pacifism, World Wars, English Literature

キーワード：A. A. ミルン，平和主義，世界大戦，英文学

【訳者解題】

本稿では、『くまのプーさん』(Winnie-the-Pooh)の作者として知られるA. A. ミルン (Alan Alexander Milne) が1940年に著した戦争に関するパンフレット、「名誉ある戦争」(“War with Honour”)の全文訳を行う。ミルンはこのパンフレットに先がけ、1934年に、自身の平和主義を表明する『名誉ある平和』(Peace with Honour)を出版していた。その中でミルンは独自の平和論を展開し、「普遍的平和」(Universal Peace)をかなえるための徹底した武力放棄の重要性を主張していた(147)。しかし国際情勢の変化、とりわけヒトラーが主導するナチスドイツの台頭と第二次大戦の勃発という歴史的事件を受け、ミルンはその平和主義を大きく軌道修正することになる。そして『名誉ある平和』の読者に対し、自身の平和論の訂正を求めるために執筆したのが、ここに紹介する「名誉ある戦争」である。

安達まみが指摘するように、『名誉ある平和』を執筆していた当時のミルンは、「戦争という最終手段に訴えずに平和を維持する方法があるはずだ」と信じていた(安達253)。ミルンにとって、戦争とは、かつて決闘の風習があったのと同じように習慣的に行われるものであり、彼はその習慣の結果を戦争ではなく平和的方法へと導くことを目指していた。そしてミルンは、その際に有効なのは軍勢力による「物理的抑止力」(physical force)ではなく、各国の名誉に訴えかける「道徳的抑止力」(moral force)であると考えていた(195)。この平和論の中でミルンが特に強調したのは、攻撃目的だけでなく、防衛のための軍勢力をも放棄することの重要性である。理由が何であれ各国が軍勢力を保有している限り、国防の口実さえつけば戦争

は容易に勃発する。そのため、攻防の目的を問わず、軍備の一切を放棄することが重要であり、仮に侵略行為が行われた際にはその侵略国は国際的に「不名誉」(public dishonour)の烙印が押されることで制裁を受けることになる(204)。そしてそれがあらゆる戦争の勃発を抑止するというのが、『名誉ある平和』におけるミルンの主張であった。

ミルンが『名誉ある平和』で展開した論は、いかなる国家も自ら進んでその不名誉の烙印を受けるようなことはいないだろうという仮定の上に成り立っていた。それは言い換えると人間の性善説に基づいた平和論であったといえる。しかし、その論はあまりにも理想主義的であったがゆえに、ミルンは重大な点を見誤ることになった。すなわち、執筆当時すでに台頭しつつあったファシズムの脅威についてである。

『名誉ある平和』の中でミルンは次のように述べている——“It is often said that Germany prepares for war while paying lip-service to peace. The truth may be that she prepares for peace while pay lip-service to war”(144)。ミルンはファシスト国家を、戦時下においてのみ存在しうるものであると考えていた。つまり、ムッソリーニやヒトラーが恐れているのは戦争が終わったときに起こりうる革命であり、彼らは軍勢力や戦争の必要性を訴えることでその存在を永らえながらも、実際には戦争を積極的に始めるより、むしろ回避するよう努めるだろうと考えていたのである(“War with Honour” 12)。ミルンはもう一度ヨーロッパに戦争が起きれば、それは世界に破滅をもたらことになると考えていた(Peace with Honour 139)。そして未来から戦争をなくすために、防衛目的の軍勢力さえ

放棄すべきだと訴えていたのである。ミルンが『名誉ある平和』の中でファシスト国家の脅威を否定した理由はおそらくその点にある。すなわち、ドイツやイタリアのファシズムが脅威であるならば、その他のヨーロッパ諸国がその脅威に備えて軍事力を増強することを認めることになり、それは同時にミルンが理想とする「普遍的平和」を不可能なものにしてしまうことになるのである (Peace with Honour 147)。そのためミルンは、依然として将来脅威となるかもしれないという可能性の中にとどまっていた「ドイツの亡霊」(German bogey)を消し去るために (Peace with Honour 134), 『名誉ある平和』の中でファシズムの脅威をあえて否定したと考えられる。

『名誉ある平和』の執筆が終わった1934年7月当時、ヒトラーは依然として首相であった。しかし同年8月には総統としてドイツでの全権を掌握した。そして「名誉ある戦争」の中で、ドイツがオーストリア、チェコ・スロバキア、ポーランド、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランスから「勝利ある平和」(Peace with Victory)を手にしたことが述べていることから (27)、このパンフレットの執筆時点で、ナチスドイツはすでにヨーロッパ中に覇権を広げていたことがわかる。つまり、『名誉ある平和』が出版された1934年から「名誉ある戦争」が出版された1940年までの間に、ヒトラーが主導するドイツはヨーロッパの平和にとって大いなる脅威へと成長していたのである。そのため、ミルンは『名誉ある平和』の中で訴えた平和論の方針を大きく変更する必要に迫られた。そしてその平和論の読者たちに対し、ナチスドイツの危険性を訴え、その脅威に対して立ち上がる必要性を訴える目的で「名誉ある戦争」は執筆されたのである。

ミルンは「名誉ある戦争」の中で、読者たちに次のように訴えている。

I may explain to them[the Pacifist who listened to me once], not why one ardent Pacifist has suddenly become, as they would say, a 'violent militarist', but why it is the very ardor of his Pacifism, unchanged since 1934, which inspires his passion now for military victory. (13)

ここでミルンは、自身が軍国主義者になったのではなく、『名誉ある平和』を書いた1934年から変わることのない平和主義者であることを強調しながら、ドイツに対し「軍事的勝利」を収めなければならないという自身の新たな立場を表明している。こう述べたときのミルンの念頭には、すでにドイツ占領下にあったポーランドの状況があった (16)。もはやこの当時のミルンにとって、平和とはた

だ戦争状態にないという意味ではなかった。むしろドイツ占領下における平和 (German Peace)こそ、深淵の底に横たわる、最たる地獄だったのである (20)。そのため、ミルンは「名誉ある戦争」の中で、ヒトラーが未来を担う子どもたちの魂を墮落させる悪であると定義し (17)、その戦争を受け入れ、ドイツと戦うことを肯定したのである (20)。

ミルンは第一次大戦が勃発する1914年以前から平和主義者だったが、当時流行した「戦争を終わらせるための戦争」(War to end war)というプロパガンダを信じ、陸軍に志願し激戦地ソンムで戦った (It's Too Late Now 211)。そして彼は、大戦の幕間の時期にあたる1933年から34年にかけて『名誉ある平和』を執筆し、攻防の目的を問わない徹底した武力放棄による「普遍的平和」を説いた。しかしナチスドイツに象徴されるファシズムの脅威が明らかとなったとき、その悪に対する「軍事的勝利」へと情熱を燃やすことになった。ミルンは自らを平和主義者として認めながら、一度は志願兵として、そして一度はそれを支持する「名誉ある戦争」の著者として、最終的に前世紀に行われた大戦をいずれも受け入れたのである。¹

ここに翻訳を試みる「名誉ある戦争」は、2つの大戦の時代を生きた平和主義者が、いかにして再び始まった戦争を受け入れ、支持するに至ったのかを如実に映し出している。それは戦争というものがどれほど人の精神に影響を及ぼし、そして豹変させてしまうのか、その衝撃の大きさを表していると言い換えることができるだろう。このパンフレットは当時を生きた人の精神を知るうえで極めて重要な記録であり、第一次大戦終結から100年を迎える現在にこそ広く読まれるべきものであるといえる。そして未来に生きその戦争の結末を知るものとして、我々は平和主義者ミルンが著したこの戦争支持論を、平和の観点から批判と反省のまなざしを向けて評価しなければならないのである。

【解題注記】

¹ミルンは1945年8月14日発行の「タイムズ」(The Times)に、日本に投下された原爆に関する記事を寄稿している。その中でミルンは反戦の意を表しながらも、原爆のあまりにも常軌を逸した威力によって、いかなる政治家も戦争の愚かさを認めざるをえないだろうという趣旨の考えを述べている ("An Alternative to War" 5)。これは核兵器による戦争の抑止を示唆するものであり、アン・スウェイトによると、以降ミルンは生涯、核兵器が戦争の抑止力になるという考えを支持し続けたという (Thwait 541)。つまりミルンは、第二次大戦勃発以降、『名誉ある平和』で訴えた軍事力放棄による平和という自身の平和論を取り戻すことは終生なかったのである。

[本文]

名誉ある戦争

「ブレンダギャストは死体から立ち上がり、『毒だ』と短く言った。『バルビツール酸の一種だな。』私は突然、ブラウン・スマイリー事件のことを思い出した。※1」そしてそのページの下を見ると、次のような場違いな情報が記載されている——「※1『ブラウン・スマイリー事件』（ポンプ出版、7シリング、6ペンス。）」。

多くの探偵ものの読者と同様、私はこの宣伝の仕方に腹を立ててきた。しかし私は今同じことをしようとしている。この小冊子の趣旨のために、そうせざるを得なかったことをあらかじめ弁明しておきたい。というのもこの小冊子は、『名誉ある平和』という私が1933年から1934年にかけて書いた本の最終章にあたるものなのだ。そしてこれは、絶対にというわけではないが、基本的には主にその本の読者へ向けて書いている。つまりこの小冊子は、平和主義者が平和主義者へ向けて書いたものなのだ。戦争についてすでに私が書いたものを抜きにして、今回の戦争について何かを書くことができるとは思えない。そのため私は、読者に自費で他の関連書籍を入手させるというリスクを犯さなければならないのだ。もっとも、そのリスクは小さなもので、私の個人的な利益も取るに足らないものではあるが。

「名誉ある平和」

私は『名誉ある平和：戦争という慣習の研究』を、一人の戦争を憎むものの立場で書いた。私の魂はそれを憎み、私の精神はそれを憎み、そして私の心のほとんどすべてがそれを憎んでいた。私にいわせると、戦争というものはただの慣習でしかなく、それは決闘の慣習と同じく馬鹿げており邪悪なものだった。いまだに、偶然にも人のつま先を踏んづけてしまったら、自らの命を守るためにはその相手の命を奪うことが必要だと考える人がいるのかもしれない。しかし我々のほとんどはそのような考えを脱するほどには進歩している。一方で、そのような決闘の慣習が存在した頃には、それはごく自然なことだと考えられていた。それはまるで現在、知り合いの女性と会ったときに帽子を取って挨拶をすることと同じくらい自然なことだったのだ。しかしながら、帽子を取るという行為は、自然なことではなく慣習的に行うものだ。それは腕を伸ばし「ハイル・ヒトラー」と言うことと同様に慣習的であり、同じくらい不自然な行為なのだ。私はこう考えていたのだ。戦争とは、それがしばしば言われるような人間に生来備わった

性質ではなく、単なる慣習によるものなのだ、と。2人の人が争いになったとき、彼らは慣習的に法廷へ行く。2つの国家が争いになったとき、そして両者がともに譲らなかったとき、同じように慣習的に戦争を行う。私には、なぜその慣習を、戦争ではなく法廷に行くように変えられないのかが分からなかった。

芸術とは対象の完全さを追及する行為であるということができるかもしれない。戯曲を書くという芸術活動は、テーマを選びそれに没頭するということであり、1つの戦争を戦うという芸術活動は、目標物を選び、それを手に入れるということなのだ。そして『戦争という慣習の研究』を書くという芸術活動は、戦争という慣習について調査を行うことだ。その本の多くの読者は私に、戦争の原因となる経済的側面を無視していたのではないかといった。もちろん私はそのようにしたのだ。幼いころ、けんかの原因となる服装のことについて無視すべきであったのと同じことだ。これまでいかに多くの人が首巻の色のことで争いを行ってきただろうか。もし人間が争いの原因の全てを排除することに決めたのであれば、人類は同時に意見の相違を排除するという不可能な任務を負うことになる。人間がより容易に行えるのは、その原因を取り除くことではなく、その原因から生じる慣習的な結果を取り除くことなのである。

もし戦争に関わる経済的あるいはその他の原因が取り除かれるのであれば、戦争が起きる可能性はほとんどなくなるだろう。もし嫉妬やその他の殺人に関わる原因が取り除かれるのであれば、死刑が実行される機会はほとんどなくなるのである。しかし死刑は、ただそこで殺人が起きないからといって、チップリング・ノートンにおいて廃止されることはない。同様に戦争の慣習も、その原因が取り除かれたからといってなくなることはないのだ。ギリシアの冷笑家であれば、トロイ戦争の原因について思いをめぐらせた後に、1人の少女をめぐって10年も争うなど馬鹿げていると言ったことだろう。しかしギリシアの平和主義者であれば、その主題について強く感じたのち、全人類が男女同性となり争いの原因となる少女という存在がいなくなるのを待つよりは、もっと直接的な手立てをしたいと考えたはずである。その平和主義者は、次のような慣習を破壊したいと願うかもしれない。すなわち、もしある人の妻がその夫に飽き他の男の元へ行ってしまったら、彼の夫としての魅力のなさが広く知られてしまうからという理由で、その

彼の傷ついた「名誉」を挽回するには、それからむこう10年、その兄弟が手当たり次第に人を殺すことが必要だといった慣習を。

私は平和主義者だった。私は、戦争が国際的な争いを収めるための名誉ある手段であるという慣習的な信仰を破壊したかった。私は、「国際的な名誉」と「国際的な威信」という慣習的な定義を破壊したかった。そして教会による戦争の慣習的な許容、詩人たちによる戦争の慣習的な美化を破壊したかった。私は現実の戦争について考えたことのない人たちによって慣習的に考えられてきた、想像上の戦争に関わるすべてのものを破壊したかったのだ。私は読者たちに、先祖の目を通した伝統的戦争観ではなく、現在の戦争を自分自身の目で見てほしかった。だからこそ私は、自分の本を『戦争という慣習の研究』と題したのだ。

奇妙な集い

著者というものは、自分自身が書いたものよりはむしろ、他の人々が彼らについて書いたラベルによって認識されるものだ。そして、これは知識の間違った伝達を招くのだ。私は今「平和主義者」というラベルが付けられている。私がどうも奇妙な集いに招かれていることに気づいたのはそんなに昔の話ではない。私は彼らに、戦争というのは民主主義が廃止されるまで存在するものだと言われ、赤いネクタイをして共産主義者の会合に参加するよう勧められた。またあるときは、戦争は銀行が廃止されるまで存在するのだと言われ、緑のシャツを着てダグラス・クレジット計画を支持するよう勧められた。またあるときは、罪が殲滅されるまで戦争は存在すると言われ、灰を頭につけ、オックスフォードグループに入るよう勧められた。これらの手紙をくれた人々はいずれも実際には彼ら自身のユートピアを設立したいと願っているようで、平和の到来はその副産物としてあったら好ましい程度のものだという印象を受けた。私は彼らの誘いを1つとして受けなかった。

それから1年後、私は何の下心もない平和主義者と会う機会があった。しかし私は（そのほうが私にとってむしろ残念なことであったが）その平和主義者も私と同じ考えのものとは感じられなかった。その会合はディック・シェパード（1880-1937、国教会宣教師）主導のものだったのだが、今では平和活動に熱心な人物として広く知られる人たちの会合だった。もっとも、彼らはその他の点では無名だが、さて、大部分において、あるいは私にはそうみえたのだが、彼らは次の戦争での自身の使命について興味を抱いているようだった。もちろん、彼らは戦場で戦うつもりはないだろう。しかし彼らは良心的に軍にかかわることを免れることができるのだろうか。負傷者を助けるとき、彼

らの魂はどう感じるのだろうか。それは彼らの主義に反する行為なのだろうか。ある人が前の戦争での彼の長い経験をいかし、良心的兵役拒否者の代表として私たちに語ってくれた。彼は軍によって幾度か投獄され、その都度脱獄したのだという。彼は確かな技術を持っていた。それは脱獄することのみならず、消極的抵抗者であるための技術だった。彼はあらゆる一般の上級曹長をもまごつかせることができるテクニックを持っていた。そして彼にはその秘訣を我々に伝授するための用意があった。彼が完全に偉大なる戦争を戦い抜いたことは明らかだった。それは私の戦争体験よりもずっと興味深いものだった。というのも、彼はもう1つの大いなる戦争を戦い抜く準備ができていたのだ。

今では、私が戦争に対して良心的に拒否をした限りにおいて（もっとも私は本当に「良心」がそれになることを疑っている、というのも私の拒否は精神や心以上のものであったからだなのだ）私は制度としての戦争に対して良心的に拒否をした。それは、私の手にあるライフルが何かを狙撃するかもしれないというわずかな可能性を拒否するためのものではなかった。私にとって戦争とは「人生」の、「時間」の、「美」の、「機会」の無駄遣いだったのだ。そして私は、それを誰が、いかにして終わらせることになるだろうが、それが終わる限りそれでよかった。それが平和的に、迅速に終わるのであればそれに越したことはないし、それが消耗を強い、幾人かの命が奪われるのであれば、そんなに悪いことはなかった。大事な点は、世界中の愛すべきものの無駄遣いがこれ以上続けられるべきではないということだったのだ。「普遍的で永久の平和」がより破滅的な戦争ののちに訪れることが天使によって明かされたのであれば、私は「よし、明日始めよう。誰と戦えばいい？」といったことだろう。そして私の任務は、それが軍務であれそうでないにしろ、要求されたままに戦争の「大義」に向けて取り組むことになるだろう。

しかしいかなる場合も、私の良心にかかわる問題では決してないように思われた。それは「文明」の良心にかかわる問題なのだ。私は文明と罪を共有し、そしてその贖いのために働いたのだ。もしもう一度戦争があったならば、私はその戦争に私も参加したことだろう。そして「普遍的平和」があるのならば、そのときは、そのときだけは、私は永久に戦争を放棄するだろう。

私が周りの平和主義者と異なるように思われる点がある。それは彼らがみな一様に、さも彼らの本当の活動は開戦が宣言されてから始まるような物言いをする点である。しかし私は思うのだ。戦争が始まったとき、我々の活動は終わるのだと。というのも、その時点で我々は失敗をしたのだから。私は、戦時下において戦争を放棄するよう説得するのは不可能であると知っていた。興奮したブル・

テリアに向かって「ビンゴ、やめろ！バカ犬め！」ということによって、野放しの犬に口輪をつけるための運動を押し進めることはできないのだ。戦争の放棄は戦争が行われていない間のみ有効に説かれるのだ。禁酒運動が（もっともきちんと調べたわけではないが）酒を飲んでいないときに有効に説かれるのと同じだ。

良心的拒否

おそらく「効果的」という言葉は、かつての、そして今の私がそうであるような平和主義者にとっては鍵となるものだろう。私が幼かった頃、有名な非国教徒の伝道者は、学校で宗教教育を行うために必要な料金の支払いに良心的な拒否感を感じていたという。彼は（当然ながら）学校での宗教教育に反対しなかったが、しかしそこで行われる、特定の形式に対して抵抗したのだ。彼は教育に捧げられる彼の支払いの割合を算出し、それから日々のちょっとした信仰を支えることになるその割合を算出したところで、自分の支払い分から15シリング6ペンス程度を差し引いて、そして良心にかけて、死ぬ準備なり牢屋へ行く準備はできたと発表したのだ。そして結果はこうだった。当局は彼の銀のティーポットを差し押さえた。すると、彼がそのようにして示した不屈の精神と信仰熱を見て崇拜者となったものが、こんなに立派な人がこんな理不尽な目にあってはいけなと、彼にティーポットを15シリング6ペンスで買い戻してやった。そして6か月のうちに、次の差し押さえのプロセスが始まった。このようにして良心は罪から救われ、大義は進展し、ティーポットは循環し続けたのだった。

さて、これで大義は進展したのかもしれない。というのも、安物雑誌はこぞってこの事件のばかばかしさを報じ、結果として多くの広告を手にするのができたからだ。しかしただそれだけであっても、この消極的抵抗は正当化されうると私は感じていた。私にとって、消極的抵抗、市民的不服従、良心的兵役拒否は、あるものが信じる大義を支えるまさにその手段だったのだ。もし彼らが失敗していたとしても、私は良心から、市民的服従またはそのすべての敵への積極的抵抗を行うことで彼らをサポートする準備ができていた。私が求めるのは、そのサポートが効果的であるということだけだった。

次にいくらそれが間違っているとしても、私が信じる大義のためであれば私の「良心」（その声の調子は確実にそれをかき括弧の中に入れてい）は私に何でもさせるのかと問われるだろう。例えば、私の良心はウソをつくことを許すのか？私ができる唯一の答えはこうだ。それは大義次第だ。しかし広い意味で、私は私の心や私の体が私のものであるのと同じように、私の魂も私のものだということかもしれない。私は他人のために命と体を投げ出す危険を冒す勇気は

ないかもしれないが、それでも自分は正しいと感じるべきなのだ。というのも、他者の魂を守るために自分の魂を投げ出すことで自分を正当だと感じることができるからだ。私の魂や良心は、百万の人々の魂に比べたら重要ではないように思える。世界の子どもたちの魂の崩壊を免れるためなら、私はどのような罪でも犯す。このことが英雄的に聞こえる場合、私はただちに、これらの状況下では、それは私にとって罪とはならないのだと付け加えることになるだろう。

そろそろ『名誉ある平和』のとある章について言及する 때가きたように思われる。その章とは出版時に多くの人から称賛され、また非難もされ、そしていまだに私自身によって引用される章、「前進せよ、キリスト教徒の兵士たちよ」（Onward Christian Soldiers）である。さて、私はそのことについて整理して言及しようと思うのだが、まず、私はそのことについて謝罪することも正当化することも、あるいは（知人たちがそうするように）興奮してまくしたてることもするつもりはない。「グラッドストンは1874年に何と言っただろうか」とはかつて解答しえない問いだった。そしてその問いはすべての選挙立候補者を混乱させたものだ。「お前は1934年に何と言ったか」という問いに私を動揺させることはないし、1934年と1940年の違いについて、その質問をした人が私よりかなり認識が薄いことを恐れなかったとしても、やはり動じることはなかっただろう。というのも違いははっきりしているからなのだ。そしてその違いはわずか一言で言い表すことができる。大臣が1934年の終わりに私に言った言葉が、もっともそんなことを考えたくもないのだが、ひょっとすると私よりもそのことについてうまく言いえていたかもしれない。「君の本についてはただ一つを除けばまったく同意する。」

そしてその言葉とは「ヒトラー」なのだ。

II

ヨーロッパは平和だった

『名誉ある平和』は1933年に執筆が開始された。ヒトラーは首相だったが、まだ全権を掌握したわけではなかったし、完全に実態をあらわにしたわけでもなかった。ムッソリーニはすでに全権を握っており、いつものように強力な発言権を持っていたが、しかしまだ脅威になるような存在ではなかった。表面上、ヨーロッパは平和だったのだ。ヒトラーとムッソリーニ、完全に人としての良心を持たぬ彼らは、しかし確かにそこにいたのだ。人は彼らを無視することができなかったし、彼らの主張について抗議することもできなかった。人はそれらをただ説明するばかりだった。私は読者がこのようにいうのを想像したものだ。「平和について、軍備の放棄について、モラルについて、良識

について話をして何になるのだ。それらを理由づけていたいどうなるのだ。ドイツを抹消せよ、そうすれば戦争はなくなるかもしれない。」だから私は「ファシストの幕間」(Fascist Interlude)という章の中でドイツの抹消を試みたのだ。つまり、ヒトラーの悪霊を抹消するために。

私の議論は簡単にいうと次のようなものだった。すなわち、ファシストの脅威は戦時下においては存続しうるのであるが、戦争を乗り越えて存続することはできないだろう。つまりファシスト国家(あるいはそれに準ずる国々)の戦後は、革命であって、独裁国家にとっての悪夢となるだろう、と。それゆえファシストの独裁者の方針は、安全や国家の繁栄のために軍備が必要であることを説きながら、彼らの国民を手中におさめ続けるために、戦争を積極的に始めるよりも、むしろ戦争の勃発を回避するものになるだろうと私は考えていたのだ。

私の考えは理屈としてはよかった。そのままでいけば、この理論は正しかったといえるだろう。しかし、私の論はこのことを忘れていた。すなわち、独裁者は彼ら自身の支配者でないということだ。当時に起きたできごとは彼らには大きすぎたのだ。

ヒトラーという言葉

もし今『名誉ある平和』を読んだのなら、その読者は「ヒトラー」という言葉がすべてのページのいたるところに殴り書きされているのを見るに違いない。私が彼について述べようとした抗いがたい結論の前に、その読者は別の前置きを挿入するに違いない。すなわち、“HITLER”と。ランドルフ・チャーチル卿はあの有名な瞬間に「ゴーシェンを忘れていた」といった。私は「ヒトラーを忘れていた」のだ。すなわち、今我々が知りうる意味での「ヒトラー」を。ひょっとすると私はそのとき知っておけばよかったとも思うし、あるいは知っていなければよかったとも思う。そのような不十分な状況下で『名誉ある平和』は書かれたのだが、書くだけの価値はあるものだった。というのも、誤った意味での「ヒトラー」という言葉を用いたところで、すべての行をしみで汚してしまうことはなかったし、すべての真実を台無しにすることもなかったからだ。バランスの面で、それは書かれないほうがよかっただろう。私が自身を守ろうとだけ思っているのであれば、それはグロテスクなほどに重要ではなかっただろう。ただし、もし私が望むとおりに「1934年に私が言ったことは気にせず、今の意見を聞いてくれ」というのであれば、私は反論を免れえないだろう。「君がそのとき正しかったというのなら、なぜ我々が必要なのか。または君がその時間違っていたというのなら、なぜ私たちがすべきなのか。」そして私は今聞いてほしいのだ。そのため私はこの試みをしなければなら

ない。かつて私の話を聞いてくれた平和主義者たちの耳をつなぎとめ、なぜ熱心な平和主義者が彼らのいうところの「暴力的な軍国主義者」になってしまったのかではなく、1934年以来変わることのない平和主義が、なぜ軍事的な勝利に導かれたのかということを説明するために。

前進せよ、キリスト教徒の兵士よ

だれもが読者に完全な誤解を与えてしまう手紙を書いたことがあるだろう。なぜだろう。我々は簡単な1つしか意味のない単語を使っているし、自分たち自身を明確に、的確な英語で表しているというのに。我々は友好的な手紙を書いたつもりだし、それが気分を害したと知ると大変なショックを受ける。なぜこんなことが起こるのか。単純に考えると、我々が手紙の裏に記した、その手紙の背景にあるはずの精神が封筒から抜け落ちてしまっているからだ。引用やファミリージョークは、そこに隠されたかざかっこを見ていない人にとっては間違った意味を持つことがあるのだ。悪気のない逸話が事実、筆者の知らない何かに触れていることもある。言葉は多くを語り、語られていない何かを残すものなのだ。

私はもう一度、今話題としている「前進せよ、キリスト教徒兵士よ」に戻し、そして次の言葉が補遺となるだろうリアルな戦争の描写を読み直すことにする。「これは戦争だ。それを非難できる教会はない。主教はそれを心から認める。公認の牧師は宗教的な面が無視されていないかを監視するために軍に帯同している。これは何を意味するのだろうか。どちらかが笑いどちらかが泣いているだろうか。」¹

戦争の描写は以下のように始まる。

「2つの国家が何かについて争っている。…それはまるで、そして実際そうなのだろうが、双方がそれを所有するための、物質的進歩へ向けてのものなのだ。」

この箇所はこのように終わる。

「片方の政府の忍耐が道を譲れば、勝った方の政府は敗者の富や領地などを、それを同化するのと同じくらいたくさん奪うことで、最初の争いの原因を治めるのだ。」

その少しあと、想像上の問答の中で、教会はこのように言っている。

教会「君は本当にロンドンの通りをドイツ軍が闊歩するのを受け入れる準備ができていうのか。ドイツが望むとおりの賠償金をきびしく取り立て、不当な併合をするための屈辱的な指図を受け入れる準備ができていうのか。」²

ミルン「私は従順な精神の元、そのようなものを受け入れる準備はありません。事実、私は彼らを憎んでいる。彼らによって屈辱を受けていると感じることは簡単だ。しかし我々は自分たちの屈辱をやわらげたり、それをなくす

ために人殺しに行くつもりはないのです。ところでこの尋常じゃない考えを受け入れられますか。人間は間違ったことをするよりは苦しみを受け入れなければならないが、国家は何かから苦しめられるよりは好きなように間違ったことをできるのか、と。」³

そしてさらに少しあとにこのように書いている。

ミルン 「私が何を追及してきたかわかってきたでしょう。つまり、キリスト教が終わり、愛国主義が始まった点だ。」⁴

我々が知っていた戦争

さて、その本では、私は1935年から39年にかけての事前の知識をもって書かなかったし、書くことはできなかった。ではどうして記さなかった「ヒトラー」という言葉によって、知性のある人々にそのことをわかりやすく説明できるのだろうか。ここで私が実際に使った言葉を見てみよう。

第一文：物質的進歩 (Material advantage)

第二文：富 (Wealth)

第三文：賠償金 (Indemnity)…屈辱 (humiliation)

第四文：愛国主義 (Patriotism)

この本を読み直し、私の書いた文章を読めば、これが「前ヒトラー」時代の本であることがわかるだろう。これは我々が知る戦争の告発だったのだ。両サイドが共犯者だった戦争だ。というのも、どちらも戦争が執り行われる際の慣習に賛同しているからだ。その慣習とは、「愛国主義」は自国への「屈辱」や「侮辱」に対して戦争が行われることを望むというものだ。戦争とは経済的動機や領土の必要性によって正当化されるというものだ。その「威信」のために人を殺す価値がある、というものだ。小さな物質的利得が一方によって差し押さえられたら、「名誉」が戦争による半永久的な物質的不利益を引き起こしながら、もともとその国が求めていたはずのわずかな利益のために、勝つか負けるか半々の可能性をかけて苦しむことを求めるということだ。

これがこの本の「背景」だ。すなわち、物質的目標物のために人殺しをするような戦争の邪悪さ、あるいは得られる物質目標物の割合に対して払われる慣習的な犠牲、それが私に憎悪を抱かせる戦争というものだったのだ。この強烈な感情が私をこの本へと駆り立てた。科学者のもつ公平さというより、十字軍戦士の情熱をもってこの本は書かれたのだ。私は1934年時点での戦争への告発として、これを取り下げるつもりはない。しかし1939年現在、我々が共有しているものへの告発として、これを提出するつもりもない。ヒトラーはその違いを生み出したのだ。

完全なる征服

ヒトラーは総力戦を生み出しただけでなく、彼はまた完全なる征服を生み出した、あるいは生み出そうとしている。すなわち、国の物質だけでなく、その体や魂をも支配しようとしているのだ。ヒトラーが征服すれば、ゲシュタポが統治する。今ポーランドに起きていることについて、君の感情が許容する範囲の穏やかな言葉でそれを言い表してみたまえ。そして君はもはや「屈辱」「侮辱」「物質的損失」といった言葉によってはそれを語ることはできないと気づくだろう。ヒトラーの「戦争」とは、我々が知る国家間の戦争ではないのだ。その戦争とは、すべてのキリスト教と文明的価値を破壊するものなのだ。国家間の戦争ではなく、善と悪の間の戦争なのだ。ヒトラーは神に抗する十字軍戦士なのだ。まったくそうなのだ。

このことに関する議論は行われていない。このことはラウシュニングの「ヒトラーは語る」の中で彼自身の言葉によって明かされている。ヒトラーの見解によると、通常の人間というものは独立した精神的存在への権利を持ちえない。そのような人間は機械の中で使われることになるのだという。そして彼がヒトラーの力のもとにきたときには、やはりそのように使われるというのだ。ヒトラーは文字通り人間性に対する敵なのだ。というのも彼は人間性などというものを信じてはいないのだから。彼は自ら選び、自ら認める反キリスト教徒なのだ。悪こそ彼の正義なのだ。

さあ、我々は彼に抵抗するだろうか。

平和主義者の議論

私はかつて、ヒトラーに抵抗することにためらいを持つ人物によって語られる2つの議論を聞いたことがある。第一の議論はこのようなものだ。

「君はヒトラーが我々の魂を征服しようとしているといったが、そんなことできやしないさ。人の魂は征服などできない。敵は所有物を奪うかもしれないし、体を傷つけるかもしれない。しかしそいつは我々に間違ったことをするよう強いることはできないのではないか。そいつは我々の魂を墮落させることはできないのだ。神は、神の思し召しのために我々は苦しむのだといった。我々が苦しむということは、神の証なのだ。」

ここで殉教の論理について神学的な議論を重ねるのは無駄だろう。答えは単純にこうだ。大人の魂は征服しえないが、子どもの魂は別だ。ヒトラーは子どもの魂を墮落しうけるのだ。彼はすでに何十万もの子どもの魂を墮落せしめた。彼は慎重に、しかも残酷にヒトラーの思想に染まった子どもたちを教育しているのだ。彼は子どもたちを精神的伝染の危険性に対して無感覚にしまった。彼らを非人間的に仕立て上げ、そして利用しているのだ。

さあ、我々は彼に抵抗するだろうか。

それでもう1つの議論は…それは先の戦争で混乱した二日酔いほどの議論でもない。その議論は、ヒトラーは悪だが我々は善だろうか、という形をとる。我々自身の歴史を見よ、語るべき我々とは何者なのか。そのようなことだ。

どんなときにも、語るべき誰かとは何者なのだろう。あるものが悪と、したがって正義のために悪に対して戦っているからといって、彼は自分が完全に善であると自称することはない。あるものが簡易金庫から30シリングを借り賭け事につかっているようにいがいが、その人物は少年から虐待されている猫を救うことができるのだ。我々が過去に現在我々が戦っているような巨大な悪を犯したとしても（そして我々は実際にはそのようなことをしていないのだが）、我々は今それと戦うことができるし、そうすべきなのだ。

しかし私はここで、「我々自身の歴史を見よ」という問題についてひと言申し上げておきたい。私が書いた『名誉ある平和』について、ハンプルクのドイツ人から手紙があった。その手紙が自由に書かれたものなのか、それともある程度校閲されたプロパガンダだったのか私にはわからない。しかし彼は、その本の中でナチスドイツが批判されていない点で同意を示しており、ナチス支配下のドイツで全ドイツ国民は幸福であると主張していた。しかし私はその返事の中で、強制収容所のドイツ人たちの幸福について疑問を呈さずにはいられないと述べた。彼はドイツ人らしい反論を見せた。「ご自身の歴史を見てください！南アフリカでの強制収容所はどのようなのですか？」と。

それに答えるのは簡単だ。私は南アフリカの強制収容所を弁護しようとしなかったし、弁護したいとも思わなかった。ドイツと南アフリカの強制収容所の間で一致しているのはその名前だけだ、と指摘する手を煩わせることさえしなかった。言うべきことはこれだけだ。英国では、幾千もの人々が強制収容所を非難することができ、実際に非難し、そして非難することが許されている。ドイツでは、強制収容所について口を開いた国民は、自身もそこへ送られることになる。それが民主制と専制君主制の違い、善と悪の違いなのだ。そして我々は結局のところ、そのような卑しむべき善の代表者ではないのだ。

ドイツの平和

平和主義者がしばしば指摘するように、9つの戦争を受け入れた人物は、10個目の戦争を何も考えずに受け入れるだろう。しかし一方で、9つの戦争を批判したものは、やはり何も考えずに10個目の戦争を批判するのだ。軍国主義者は「戦争とは人間の本質だ」といい、その言葉によって考えることを放棄している。かつて「戦争は馬鹿げている」といっていた平和主義者がその考えることを放棄するので

あれば、それは哀れなことだ。

というのも、その彼は、彼が非難しつつけてきた軍国主義者と同じ失敗をしようとしているからなのだ。つまり、その意味が変わってしまった言葉への忠誠をいまだに貫き通すという失敗だ。

1934年に、私はこう述べた——「戦争という言葉がその意味を失ったのと同じことです。もはやこんなものは戦争ではありません。これはもはや、言葉では言い表すことができないようなものになってしまっています。それがボクシングの試合と異なるのと同じくらい、ナポレオン戦争とも異なるものになっています。」私は読者に、これまで戦争と考えられてきたものを忘れてもらい、そして現代の戦争についても一度考えてもらいたかったのだ。というのも、「新たな考えの中では、現代戦争などというものはありえないもの」だからだ。

しかし今や平和という言葉が意味を失ってしまっている。もはやこんなものは平和ではないのだ。そのため、ここで私は読者に、これまで平和と考えてきたもののことを忘れてもらい、ドイツの平和について今一度考えてみて欲しいのだ。（いまや戦争状態にはない）ポーランドが経験している平和を。というのも、新たな考えの中で、ドイツの平和などというものは完全にありえないものだからなのだ。

1934年に私は次のようなことを書いていた。「現代の戦争とは、まったくもって明確に、そしていかなる精神的な逃げ場もないほどに、幾千もの女性や子どもの首を絞め、毒をあげ、そして死の苦しみに至らしめるものだ。キリスト教徒もユダヤ教徒も、無心論者も不可知論者も、みな自身の人生の哲学をそれに合わせて受け入れなければならない…。真実は今ここにあり、自分自身に対しその受容を正当化しなければならないのだ。そしてその正当化とは、自分にとっていかなるときも神聖化されるであろう完全なる真実として形作られることになるのだ。」⁵

この言及は1934年の教会に対して述べられたものだ。すなわち「前進せよ、キリスト教徒の兵士たちよ」の章においてだ。今、私はこの言葉を自分自身に投げかけている。私はその真実を受け入れ、そしてこの戦争を受け入れる。というのも、ドイツの平和と呼ばれるものは、すなわち現代戦争を意味するからなのだ。いやそれよりも悪い意味だ。それは、身体の死をもたらすのみならず、精神の毒殺を意味するのだ。そして常に神聖視されるべき究極の真実は、肉体よりも精神のほうが重要だということなのだ。

今の我々には、平和という天国と戦争という地獄という二択から答えを選ぶことはできない。我々は2つの地獄からの二者択一を迫られているのだ。つまり、我々が否定してきた「平和」という地獄は、さらなる深淵の底に横たわっているのだ。

「オオカミがきた」

いたずら目的で頻繁に「オオカミが来た」と叫んだ少年が、本当にオオカミが現れたときに村人から信用されなかったという寓話は、他の寓話と同様にある教訓を表すものだ。その教訓は少年に対して示されたものだ。「ばかなやつだ！やつに起こったことを見てみろ！」と、しかし同様に村人たちにもある教訓が示されている。ばかなものたちだ！彼らに起きたことをみてみろ！というのも少年は何も失わなかったが、彼らは家畜を失っているのだ。彼らはその損失に値するほどの何かをしたのだろうか。事件がおきたときに村人たちの心に浮かんだであろう推論について考えてみよう。

1. この少年は実際にはオオカミなどいないのに、3度も「オオカミが来た！」といった。

2. そのため今回はオオカミなどいないはずだ。

これほど馬鹿な考えがほかにあるだろうか。彼らが考えるべきだったことはこうだったのだ。

1. 少年はいつかオオカミがやってきそうだという理由でそこにいる。

2. オオカミが現れたとき、少年が叫ぶのは確実だ。

3. 昨日少年をひっぱたいた後なので、もしオオカミがいないなら少年が叫ぶ可能性は低い。

4. そのため、オオカミがそこにいるという可能性は高い。

そしてそれがまたしても誤報だと分かったとしても、その推論は次の警告においては真実となるかもしれない。馬鹿め、なんと愚かな村人たちよ！

多くの（私に手紙をよこしたような）平和主義者にとって、「オオカミがきた」という叫びは以前にもあったという事実が障壁となっているのだ。

彼らは憤り深くこういう——「戦争を終わらせるための戦争ですって？あなたは前の戦争でもそうおっしゃったじゃないですか」

「ヒトラーが悪魔ですって？あなたはカエサルのおかげにも同じことをおっしゃったじゃないですか！」

「この戦争は他の戦争とは違うですって？あなたご自身が、軍国主義者が戦争のたびにいうことだどご指摘されたんじゃないですか！」

「我々は自由のために戦っているですって？自由のための戦いを馬鹿げているといったのはあなたご自身じゃないですか！」

「我々は神のために戦っているですって？あなたご自身が神と国を同一視する教会を痛烈に批判したんじゃないですか！」

これは大変良い反論だ。きっと討論会場にでも住んでいるのだろう。しかしそれは、オオカミがきていないことを証明するものではない。

私は以前どこかでこのようなことを書いた。三流の精神は多数派とともに考えることを好み、二流の精神は少数派とともに考えることを望む。そして一流の精神は考えているという行為そのものを好むのだ。同じ理屈で、こういうことが可能だ。一流の精神とは、過去を忘れていないのではなく、過去を忘れることができないものでもない。一流の精神とは、過去を用い、しかしそれに左右されない精神、目の前の真実以外いかなる人やものから独立した精神のことなのだ。その精神は名状しがたいものと考えを共有する際に高められるのと同じくらい、単純なものと考えを共有するときに少し乱されるものなのだ。その精神は、喜んで正しいと考えるもののために戦うことができるのだ。たとえショー社の人里離れた社内にあたとしても、反動主義者の大きな群衆の列にあたとしても。

すべてのおろかな軍国主義者がそんなものいやしないときに「オオカミがきた！」と叫んだとしても、そのオオカミは我々の扉の近くまでは来ているのだ。たとえすべての利口な平和主義者が、オオカミがいないからといってそんなものはいないといったとしても、オオカミは我々の扉の近くまで来ているのだ。幼獣のようにやさしく扱えばオオカミというものは陽気な生き物だという考えに我々が固執するなら、今回のオオカミはすでに優しく扱われてこなかったのだ。もし6年前に我々が英国より西にオオカミなど一度もきたことはなかったと断定的に証明していたら、恐らく今回のオオカミは動物園から逃げ出してきたのだ。あるいは動物学では分類されていない、悪臭のする異種配合した新たな動物なのだ。我々が過去に正しかったか悪かったかなど、いったい何の意味があるのだ。我々と我々の子ども達を待っているのは、死、あるいはそれよりも悪いことだ。さあ、何をしようか。

III

3つの可能性

理論上では、3つの可能性がある。

1. イギリスの勝利

2. ドイツの勝利

3. 勝利なき平和：

(a) ドイツが現状で勝ち取っているものはゆずって。

(b) 正当にドイツのものと同意されているものと同様に、現在ドイツが支配するヨーロッパのいかなる地域の所有も認めずに

いずれの選択肢の中で、最後の（3）の可能性が、特定の平和主義者のスローガンとしてきたところの、「今こそ平和だ！（PEACE NOW!）」だといえる。

私は、自分が考える平和主義を効力のあるものにするこ

とを重要だと考える平和主義者であると言ってきた。しかしみながそれを読まなければ平和について何も書かないと言っているのではない。あるいはそれを読んだとき、みなそれがすぐに行動に移さなければならないと言っているわけでもない。つまりこういうことなのだ。私にとって重要なのは、知りうる中でもっとも効果的な言葉を使って記し、そしてその本がもっとも効果的なやり方でみなの前に現れることなのだ。もし結果として私が10名にその主張を受け入れさせることに成功したら、そのとき私はその主張に対して効果的な寄与を行ったといえるのだ。もし執筆が失敗であったり、論が破綻していたり、出版のタイミングが悪かったことで私が誰も説得しえないのだとしたら、たとえ私の平和への愛がまだ煌々と燃えていたとしても、それによって私は、自身の主張のために自分の無能さをさらけ出す以外に何もできなかった間抜けな平和主義者であると考えよう。

私は平和主義者であるが、実践的な平和主義者でありたいと考えている。私はまだ戦争が廃止されることを願っている。では先の3つの可能性のうちで、どれが最も戦争の廃止に効果があるだろうか。いずれも我々に確信を与えてくれない。しかしどれが一番効果的な出発地点になるだろうか。

ドイツの勝利とは、その他のヨーロッパ諸国と同様に、イギリスがドイツの平和の傘下に下ることだ。私はすでに私の意見として、そのような平和は戦争より悲惨だといった。そんなことはない信じたいが、私が生きているうちにそのような光景を見ることになれば、私は「平和」への告発文を書きたいと願うに違いない。他の平和主義者たちは、まだ戦争が最大の敵なのだと感じているかもしれない。彼らはそれを告発するのに都合の良い状況にいるのだろうか。少なくとも、ドイツの支配下で平和主義者が送られることになる強制収容所からではないだろう。私も彼らも、そんなことになれば、ゲッペルスや彼の見下げ果てたファシストの代表者たちが許可したことしか書くことも広めることもできなくなることを知っているのだ。

勝利なき平和、または「今こそ平和」。これを考えるにあたり、実践的な平和主義者である私は自身に2つの問いを投げかける。「私にその舵を取ることができるのか」「それが訪れたとき、私はそれを効果的に使うことができるのか」と。

もしイギリスの勝利が自らの主張を最も進展させると考えるのなら、彼はその勝利をイギリスにもたらすための手助けができる。

もしドイツの勝利がその主張を最も進展させると考えるのなら、彼はその勝利をドイツにもたらすための手助けができる。

しかし彼は今戦争を止めるための手助けができるだろうか。

否。話をし、書き、パンフレットを配布し、街頭演説でギャーギャーと叫ぶこともできるだろう。しかし、この戦争を止めることはできないのだ。もしヒトラーとゲーリングがそれを聞いていて、うなずきながら、「このホブキンソンという人物は大変いいセンスをしている…」というとしたら、いや、それはフェアではない。せいぜい彼らが彼の言っていることを聞いたという事実だけでも良い。彼はそれだけで「私はベストを尽くした。彼らに語り、そして彼らが私を信じなかったとしても、それは私のせいではない」ということになるのだ。しかし彼は、彼らが聞いてはいないことを知っているのだ。彼は自分が演説していることが、ドイツにわずかばかりの影響ももたないことを知っている。しかしそうであっても、彼はいうのだ。「私の国の人々に演説を行うのは私なのです。そして同じ心境のドイツ人が彼らの国民に演説を行うのです。私たちの間では、戦争を止めることができます。」そうだろう。それが答えなのだ…彼は知らないのだ。彼と同じように演説をしたドイツ人は、射殺されるか強制収容所へ送られるのだ。

そのため、戦闘部隊の中でも英国だけが、戦争を止めることができるといわれているのだ。もし英国が「正当にドイツのものと同意されているものと同様に、現在ドイツが支配するヨーロッパのいかなる地域の所有も認めずに」戦争を終えることができれば、英国は戦争に勝利する。そしてもし英国が「ドイツが現状で勝ち取っているものはゆずって」戦争を終えれば、英国はその戦争に敗北するのだ。つまり、平和主義者が「戦争をやめろ」と叫ぶとき、彼らは同時に「戦争に勝て!」と怒鳴っているのだ。それは我々がそうしようと努めているものだ。あるいは「降伏せよ」と怒鳴っているのだ。それはドイツが我々にそうさせようとしているものだ。いずれの場合でも、彼は勝利なき平和をもたらすことはできないのだ。

「勝利なき平和」

つまり平和主義者の「戦争をやめろ」という叫びは、願わしい結果をもたらす点でまったく非効果的だ。つまり、勝利なき平和をもたらす点において、しかし仮にそれがもし効果的であったとしても、勝利なき平和は戦争の放棄への最善の出発地点なのだろうか。

このような議論がしばしば行われる。戦後の安定した平和への唯一の希望は、協定で定められた平和である。なぜなら、勝利とともにある平和とはつらく苦しいものであり、将来の戦争の種であるからだ。ここでは仮にそれが真実だとしてみよう。つまり過去に真実だったことが、いつの時代も真実だということにしよう、ということだ。しか

しそのとき大義は失われるのだ。というのも、ドイツはすでに「勝利とともにある平和」をオーストリア、チェコ・スロバキア、ポーランド、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランスにおいて勝ち取ったのだ。苦しみと将来の戦争への種は惜しみなくヨーロッパ中にまかれてしまい、もはや安定した世界が訪れる希望はないのだ。こうも答えられるかもしれない。もし今ドイツと平和協定に至れば、我々は「疑いもなく」（しかしその発言者はどのようにかは説明しない）それらの国々が返還されるべきだという交渉をドイツと交わすことができる、と。素晴らしい。しかしそれはつまり、ドイツは自らを征服されることなく9つの国を征服し、そしてまだ将来の戦争の種をまいていないということを意味するのだ。もし平和主義者がこれを信じるのなら、なぜ彼はイギリスがその1つの国を征服することをそれほど恐れているのだろう。

真実はもちろんこうだ。ヨーロッパ諸国の間では、勝利なき平和など今の時点では不可能なのだ。勝利は得られてきた。英国とドイツの間では、それはまだ可能だろう。だから何だというのだ。

勝利なき平和とは、ヒトラーが依然として権力者であるという意味だ。2つの事実はあまりにも明確なので、いちいちそこに注意を喚起するのがばからしいほどだ。まるで友人とラドゲート・ヒルの頂点に立ち、その友人に向かってこのようにいうようなものだ。「近所に教会のようなものがあることに、君は気付いているだろうか。」

1. 我々はヒトラーを（そしてムッソリーニを）彼らを倒す以外に退位させることはできない。
2. ヒトラーとムッソリーニが退位するまで、戦争の廃止を提案することは効果的ではない。

ムッソリーニ本人の言葉を見てみよう。

「ファシズムは永遠の平和の機能も可能性も信じてはいない。平和の仮説のもとに作られた教義はファシズムとは相いれないものだ。」

ヒトラーから同様の言説を見つけ出す必要はないだろう。行動はより大きな声を持つ。我々はドイツのノーベル平和賞受賞者がどうなったかを知っている…。

つまり平和主義者は勝利なき平和を得る手助けをすることも、それを機能的に活用することもできないのだ。

彼に残された大義への希望に関する唯一の可能性は、英国の勝利ということになる。

民主主義のために

英国の勝利とは、独裁制に対する民主主義の勝利ということになる。もはや私の論にとって希望は民主主義を除いてないのだ。

それについては2つの理由がある。第1の理由はこうだ。世界中の大多数の人々が平和主義者であるならば、我々は人類の進化の段階に達している。それは部分的には、先の戦争で完全なる虚無を我々が学んだという苦々しい経験によるものだ。そして部分的には、ますます凶暴になってゆく戦争への知識によるといえる。そして何よりも、その戦争の恐怖は職業的兵士ではなく、我々すべての人々が耐えなければならないものだという認識によるものだ。

しかし世界の「人々」(peoples)が平和主義者であるにも関わらず、世界中の個々の人々(individuals)はそうではない。文明の歩みとは中世の軍隊の行進のようなものだ。斥候兵が先頭にいて、主要部隊がおり、落伍者がいる。しかし文明の進歩について語るとき、そこには落伍者が計算に含まれていない。我々は祖先よりも清潔だといっても、そのとき念頭に浮浪者やノミのたかる子どもたちを想定していない。過去の人々より騙されにくくなったといっても、そのとき念頭には右往左往する愚か者や日曜の占星術師のコラムを読むような愚か者はないのだ。そしてもし我々が、より人間的で、より生き生きとし、力による支配に対しよりショックを受けるようになったというのであれば、そのとき無法者や殺人者などは念頭にはないのだ。民主主義的な国では、人々、つまり主要部隊に当たる人々は、その国が達した文明のステージに目印をつけている。戦争の段階を超越した文明のステージに。しかし全体主義国家では、無法者がいとも簡単に独裁者になることができる。人々(民主主義)が、個人(独裁者)によっては与えることができない平和への保護を与えろという理由の1つはこれだ。

そしてもう1つの理由はこうだ。全体主義国家は定義の上では、そこに属するものではなく、国家の利益のために存在する。だとすると、もし国家が自ら命を持つと主張し、そこに属する個々の人々の命はそれよりも下位のものだと言ったとしたら、その国の命とは他国と競い合うだけの命ということになる。そしてその勝利とは、その競争相手に対する勝利でしかないのだ。他の文明から切り離され、全体主義的な体制を築き上げた太平洋に浮かぶ島の人々について想像することができれば、そうなるに違いないということがわかるだろう。その島では個々人はこのように言われる。「君に起きたことなどたいしたことではないんだ。ただ1つ重要なことは、島の富だけだからね」と。我々はそれがナンセンスだと考える。考えられる「島の富」とは、島人たちの幸福であると我々は考えるのだ。そして全体主義的なこの島は、近隣の島と競い、そして勝利することでのみその存在を正当化できることを、我々は知っているのだ。したがって、戦争の成功とは、完全な勝利であり、そ

れこそが、その全体主義的島の自己表現となりうるのだ。

それゆえ、ヒトラーやムッソリーニやスターリン支配下の体制、およびそれに類する政府の形式が正真正銘の政治的教義であっても単に独裁制への言い訳であっても、彼らは世界平和への障壁であるし、またそうでなければならぬのだ。もしこの戦争が民主主義の勝利を確認するのなら、その時初めて、戦争は本当に終わるのだ。

その通りだ。先の戦争で我々は同じことを言い、そして戦争は終わらなかった。ライト兄弟は試作したいくつもの未完成の飛行機について、それは飛ぶといった…がそれは飛ばなかった。そして遠征隊は遠征を行うたびに今回は北極へ到達するといった…が到達できなかった。しかし人々は希望を捨てず、そしてついに、彼らは勝ったのだ。そして我々平和主義者は、彼らとともにいながら、最初の失敗でその主張をあきらめてしまうような臆病者なのか。私にはそれが信じられない。

「私は信じる」

自明であると思われる何かについて話をしようとするとき、その証明が必要とは思われないにも関わらず、その何かについて証明しようとするとき、どこから始め、どこで終わればよいのかわからなくなるものだ。もし私が友人に、2枚の6ペンス硬貨が1シリングと同じ価値であると証明しようとするなら、私はこのようにいうだろう。「ええと、君も認めると思うけど、思うに、2かける6は12だよ」と。そしてもし彼が力強く「NO」と答えたら、頭をかかえ、そしてこう考えることだろう。「さて、果たして彼に1の2倍が2であるかを尋ねるべきかどうか。そのリスクを負うかな。もし彼がそれも否定するなら、どこから始めたらいいんだろう。どれくらいまで戻ることになるんだろうか。」

もっとも彼は2枚の6ペンス硬貨がクラウン硬貨の半分の価値があることを理解しているのだが、しかしおそらく、私のその友人こそが、同様の危惧に対する問題となるのだ。

私は1の2倍が2であることを信じているのと同じように、以下のことを信じている。

私は、ナチスの支配は人類がこれまで直面したことがないほど不潔で吐き気をもよおすような存在だと信じる。

私は、もしこのまま抵抗しなければ、ナチスは拡大し、世界中を転覆させると信じる。

ナチスが支配した世界では、立派なもの、人間性をもったもの、誠実なもの、勇気や知性や想像力があるもの、隣人に対し優しい考えを持ったもの、幼子に対する思いやりをもったもの、真実を愛するもの、美を愛するもの、神を愛するもの。これらすべてのものたちが存在できない世界

であると信じる。

それゆえ、あらゆるコミュニティが無法者の支配を排除するように、このような世界を排除するのが我々人類の使命であると信じる。

私は、そのための方法は武力を使うほかにはないと理解している。

私は言葉によって恐れをなすことはない。もしこの武力の使用が国際戦争と呼ばれるなら、その時私は人生で初めて、国際戦争を認めることになる。もしそれが内戦と呼ばれるなら、それは初めてではないが、私は内戦を認めよう。もしそれが警察の行為と比較されるのなら、以前と同様に、私は警察による行為を肯定しよう。もしそれが悪への抵抗だといわれるなら、私はいつでもそうだと願っていたように、私は悪への抵抗に賛成だ。

それに抵抗し、それを打ち破ったときだけ、文明は再びその歩みを始めることができるのだ。

アメリカへ

おそらく、私が5月のはじめにアメリカに対して呼びかけた詩の中から数行を引用し、このパンフレットの最後を締めくくることがいいだろう。

その通り、「戦争は地獄だ。」

そしてもし悪魔が権力を掌握している平和なら、その平和も地獄だ。

しかし、もしこれがあなたのけんかではないというのなら、そしてこれがあなたの出番ではないというのならもしあなたが平和を選ぶのなら、その選択は正しい。

しかし、軍を解体せよ、軍艦を燃やしてしまえ

今戦っていないものと二度と争わないように

戦争へと駆り立てる掛け声が二度とあなたの口から出ないように

あなたが誓うことができる信仰はもはや生きてはいない

もはや戦うべき大義を失ってしまったのだ、たった1つ

たった1つの戦いの証、たった1つの戦いの歌

悪に立ち向かう正義という大義が。

【訳注】

- 1 *Peace with Honour*, p.63からの引用。このように、ミルンはこのパンフレットの中で、『名誉ある平和』に自身が書いた言葉を何箇所も引用し、以前の自らの主張を訂正しているのである。
- 2 ミルンはしばしば自身の論を展開する目的で、架空の人物との問答を用いた。ここに登場する「教会」

(Church) はその1つである。

3 *Peace with Honour*, p. 70からの引用。

4 *Peace with Honour*, pp. 72-73からの引用。

5 *Peace with Honour*, p. 120からの引用。

引用文献

Milne, A. A. "An Alternative to War." *Times*. 14 Aug. 1945: 5.

-----, *It's Too Late Now: The Autography of a writer*. London: Methuen, 1939.

-----, *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.

-----, "War with Honour" . London: Macmillan, 1940.

Thwait, Ann. *A. A. Milne: The Man behind Winnie-the-Pooh*. New York: Random House, 1990.

安達まみ. 『くまのプーさん：英国文学の想像力』. 光文社, 2002.